

松尾芭蕉の紀行文の名作「奥の細道」を、俳人で芭蕉研究の第一人者である荻原井泉水が描いた俳画45点でたどります。

荻原井泉水の

# 奥の細道

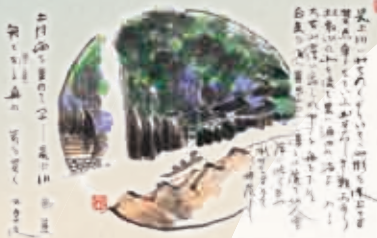
## 俳画展



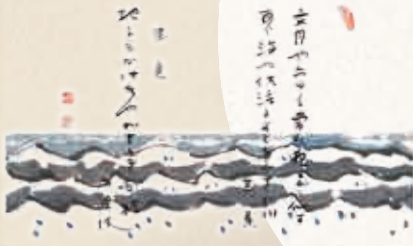
日月過客



山寺立石寺



白糸の滝



出雲崎 あらうみ



芭蕉旅姿

会期

令和4年7月4日(月)~9月10日(土)  
(2022)

- 開館 / 午前10時~午後5時 (入館は4時30分まで)
- 入館料 / 一般500円 大高生300円 中小生200円 団体割引・20名以上
- 休館日 / 日曜・祝日 土曜日は小・中学生無料

つるい 敦井美術館

〒950-0087 新潟市中央区東大通1丁目2-23北陸ビル1階

TEL: 025(247)3311 FAX: 025(247)3340

公益財団法人 敦井コレクション

本チラシをご持参下さい

一般入館料

100円割引いたします

- 本展覧会のみ有効といたします。
- 1枚につき1名のみといたします。
- 他の割引との併用はできません。

**【アクセス】**

- JR新潟駅万代口(北口)より徒歩3分
- 車で新潟西ICより約20分、紫竹山ICより約12分

**お知らせ**

お車で越しのお客様は、下記の「敦井産業東大通第一駐車場」をご利用下さい。★40分無料券を差し上げます。尚、満車の際はご容赦願います。

新新潟 東映ホテル ● 第四北越銀行 駅前支店 ● ローソン ● アパホテル ● 敦井美術館 ● 北陸ビル ● 第五マルカビル ● ホテル グローバル ビュー新潟 ●

↑ 萬代橋方向

敦井産業 入口 駐車場 ● ダイハツ ● 大樹生命ビル ● 帝石ビル ● マルタケビル ●

明石通 ● 東大通 ● 万代口 ● 新潟駅 ● 新幹線ホーム 南口 ● 東横イン ●

バスターミナル 万代口 ●

← 至東京 ●

# 荻原井泉水の 奥の細道俳画展 出品目録

作 者	作 品 名	制 作 年	形 状・材 質	寸 法 (横×縦cm)
荻原井泉水	奥の細道俳画	昭和45年 1970	紙本着彩軸装	横物 53.6 × 42.0 条幅 33.2 × 98.2
1 日 月 過 客	横物 16 武 隈 の 松	条幅	31 出 雲 崎 あ ら う み	横物
2 雛 の 家	〃 17 松 島 の 宿 に て	横物	32 親 不 知	〃
3 首 途 千 住 ま で	〃 18 松 島 瑞 巖 寺	〃	33 市 振 の 関 萩 の 花	〃
4 松 並 木	〃 19 奥 州 石 巻	条幅	34 市 振 の 関 新 作 能	〃
5 芭 蕉 旅 姿	条幅 20 平 泉	横物	35 有 磯 の 海	条幅
6 日 光 山 麓	横物 21 金 色 堂	条幅	36 芭 蕉 像	横物
7 日 光 山 中	〃 22 尾 花 澤 清 風 亭	横物	37 すゝき 原	条幅
8 裏 見 の 滝	〃 23 山 寺 立 石 寺	〃	38 加 賀 小 松	〃
9 那 須 野	〃 24 白 糸 の 滝	〃	39 那 谷 寺	〃
10 黒 羽	〃 25 羽 黒 山 詣	〃	40 萩 の 原	横物
11 蘆 野 の 柳	〃 26 月 山 頂 上	〃	41 吉 崎 入 江 汐 越 の 松	条幅
12 白 川 之 関	〃 27 象 潟 干 満 珠 寺	〃	42 敦 賀 の 宿	〃
13 須 賀 川 等 躬 宅	〃 28 鶴 象 潟	〃	43 大 垣 の 庄	横物
14 忍 文 字 摺	〃 29 象 潟 合 歓 の 花	〃	44 御 遷 宮	〃
15 飯 坂 の 湯	〃 30 出 雲 崎 七 夕	〃	45 宇 治 橋 伊 勢	〃

## ◆ おぎわらせいせんすい 荻原井泉水の「奥の細道俳画」について ◆

『月日は百代の過客にして行きかふ年もまた旅人なり』の名文で始まる松尾芭蕉の「奥の細道」は奥羽・北陸を旅したときの紀行文で芭蕉の代表作として広く知られています。

芭蕉が「奥の細道」の旅に門弟の曾良<sup>そら</sup>1名を供にして深川を出立したのは、今から333年前の元禄2年（1689）3月27日のことで、このとき芭蕉は46歳でした。江戸から白河の関を越えて、奥羽の地に踏み入り、松島を訪ねて称賛し、山寺、羽黒山を越えて象潟<sup>きさがた</sup>まで北上し、ここから日本海沿いに北陸路を南下して敦賀に至り、9月初頃に大垣に到着して旅は終わりますが、この間およそ160日、行程600里（約2,340km）という長旅でした。芭蕉らは大垣で休む間もなく、9月6日に伊勢の御遷宮参拝のために舟にのり、『蛤のふたみにわかれ行く秋ぞ』の句で、この紀行文は終結します。芭蕉はこの5年後の元禄7年（1694）に51歳で大坂で死去いたしました。

作者の荻原井泉水は一高在学中より正岡子規に師事して俳諧の道に進みましたが、その研究の中で松尾芭蕉の「奥の細道」の名文・名句に魅せられ、その足跡をたびたび訪ねた一人です。井泉水は書でも一家をなし、晩年に俳画を描き始めましたが、昭和44年頃当館創設者の故・敦井榮吉がこれに着目して「奥の細道」全編の俳画揮毫を依頼いたしました。井泉水はこれに応えて一年余りを費やし、奥の細道の主要場面を描いて本文を書き添え、さらに自身の「余情」や「連意」の句も添え書きして「奥の細道俳画」50幅の労作が完成いたしました。このとき井泉水は86歳でした。

本展では重複する場面の5幅を除き、45幅を展示いたしましたので、芭蕉の「奥の細道」の全容を知ることができます。どうぞごゆっくりとご鑑賞下さい。

### おぎわら せいせんすい 荻原 井泉水 OGIWARA Seisensui

明治17年（1884）6月16日～昭和51年（1976）5月20日 没年91歳

東京・芝神明町に生まれ、本名・藤吉。麻布中学、一高、東京帝大文学部、同大学院と進み、一高在学中より正岡子規に師事す。明治44年（1911）句誌「層雲」を創刊し河東碧梧桐と季題無用の新傾向句を提唱、更に大正3年頃から自由律俳句を提唱して、その確立と進展に尽力し、その門からは種田山頭火や尾崎放哉などを輩出した。大正12年関東大震災により肉親を失い京都へ隠棲、西国三十三ヶ所巡礼や、芭蕉の奥の細道の跡を訪ねはじめる。のち鎌倉に移り「奥の細道ノート」「奥の細道風景」など著作や句集を多く刊行した。昭和40年日本芸術院会員、同43年勲三等瑞宝章受章。死去に際し従四位に叙せられた。